様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２４年　６月　１日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０１９５
研究課題名（和文）　近世琉球における和文学の研究
—擬古文物語の考究および和歌の基礎的研究—
研究課題名（英文）　Study of the Japanese literature in early modern Ryukyu

研究代表者
萩野　敦子（HAGINO ATSUKO）
琉球大学・教育学部・教授
研究者番号：90343376

研究成果の概要（和文）：1700 年代の琉球で平敷屋朝敏によって書かれた和文による物語を学術的に研究した。具体的には、四編の物語に詳細な注釈と現代語訳を付し、日本文学との影響関係について考察した。また、同時期に琉球で詠まれた和歌について、データベースの作成に着手した。

研究成果の概要（英文）：
I have been studying tales by the Japanese written by Heshikiya-Chobin in Ryukyu of the 1700s. Specifically,I have given detailed notes and a modern language translation to four tales,then I have considered the influence relation with Japanese literature. Moreover,I started making a database about the 31-syllable Japanese poem composed in Ryukyu at the same period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：近世琉球、和文学、平敷屋朝敏、日本文学との影響関係、伝統的な言語文化

１．研究開始当初の背景

(1)平敷屋朝敏の四編の擬古文物語については、玉栄清良『殉教の文学　平敷屋朝敏の小説』（私家版、1984 年）および仲原裕『平敷屋朝敏作品集』（私家版、1994 年）が語釈や現代語訳を付して全容を明らかにしているが、本格的注釈を施すに至っていない。ここで言う本格的注釈とは、物語内の文章表現や筋書きが本土（ヤマト）の先行作品にどのような影響を受けているか、あるいは影響を受けつつも新しさを出しているか、を「具体的に」解明することである。報告者は 2008 年度末には「平敷屋朝敏の擬古文物語に関する基礎的研究—本文と注釈—」として、うち二編については注釈をまとめており、それが本研究の出発点となった。

(2)近世琉球に詠まれた和歌としては、『沖縄集』『沖縄集二編』が残っている。これについては、その編者である宜湾朝保の私家集（ただし他撰）『松風集』とともに池宮正治・嘉手苅千鶴子・外間愛子編『近世沖縄和歌集本文と研究』（ひるぎ社、1990 年）に全歌が

掲載され、全容が知られるが、それには語釈や現代語訳が付されず、本格的な注釈研究には及んでいない。また同書には、初句索引と作者索引はあるが語彙索引はない。沖縄では琉歌研究は盛んだが、和歌研究はあまり興味を持たれていないため、それを俎上にのぼすこと自体に先駆性があった。

２．研究の目的

(1)本研究は、副題が示すように二本の柱―「擬古文物語の考究」と「和歌の基礎的研究」―から成る。前者については、報告者自身の研究成果を生かしつつ第一人者たる平敷屋朝敏の四編の作品について更なる考究を行い、日本文学の流れが近世琉球に及んでいたことを具体的に明らかにすることを目指す。

(2)後者については、宜湾朝保編のアンソロジー『沖縄集』(36 首)『沖縄集二編』(1439 首）を対象にデータベースを作成し、語彙索引作りなどの基礎的な作業を行う。それをもとにした詳細な分析は、本研究期間の次の段階においてなされることになろう。

(3)なぜ本研究は、物語と和歌の二本立てであるか。報告者は平敷屋朝敏の擬古文物語の注釈作業を通じて、そこに綴られる散文が和歌言語への深い素養なしには成立しえないことを実感した。朝敏自身の和歌は諸資料を集めても 20 首弱しか残っていないが、同時代歌人たちの和歌に視野を広げることで、朝敏および後続の擬古文物語を成り立たせる「大和言葉」の素養の実態が見えてくると思われる。そもそも本土（ヤマト）の和文（散文）もまた和歌言語（そこには日本人・日本語ならではの感性が凝縮している）に深く根ざして成り立っているのであるから、近世琉球においても同じように散文言語と和歌言語とは交流しあっていて当然である。

　ゆえに、物語と和歌の研究を並行することによってこそ、近世琉球文学の一翼を担う和文学のすがたが明らかになるはずである。先行研究（池宮正治や関根賢司など）も指摘するように、琉球の和文学は漢文学とともに琉歌や組踊といった琉球の伝統文化にも大きな影響を及ぼしており、近世琉球をめぐる文化・文学事情を総体として理解するには、和文学の研究は今後ゆるがせにできないのである。

３．研究の方法

(1)平敷屋朝敏の擬古文物語四編（『若草物語』『貧家記』『苔の下』『萬歳』）についての考究。→主として本土（ヤマト）の謡曲および中世・近世小説と朝敏作品との影響関係を調査し、すでに明らかにしている王朝文学との影響関係にその成果を加えることで、朝敏作品が成立するに到った文学的環境を明らかにする。

(2)『沖縄集』『沖縄集二編』の基礎的研究。→両集についてデータベースを作成し、使用語彙の傾向や特徴、本土（ヤマト）の和歌文学から受けた影響の実態について明らかにする。

４．研究成果

(1)二本の柱のうちのひとつ「擬古文物語の考究」においては、平敷屋朝敏の四編の擬古文物語について、次のような注釈集成を構築した。これは『貧家記』の注釈集成であるが、校訂本文を示したあとに、先行注釈書からの指摘を（栄）（仲）、先行論文からの指摘を（波）（那）として掲げ、さらに（私）として報告者の見解を示したのである。四氏の見解を一つにまとめる作業そのものに意義があるほか、過去に指摘されていない日本文学（『貧家記』では特に『土佐日記』）からの影響について、多くの指摘を行うことができた。

本文

①師走それの日のあけぼのに都を出でて②小那覇といふ所より船出す。③道すがら④景気多かれど、目もつかず、ただ帰る波のみうち⑤ながめられて、⑥「うらやましくも」と詠み給ひけむ業平の君の昔ぞおぼゆる。

注釈

①師走それの日

（栄）「師走」陰暦十二月の別名。／「それの日」ある日。某日。

（波）「師走それの日」という不定称を用いた書き出しは、『土佐日記』の序「それの年の、十二月の、二十日あまり一日の日の戌の時に門出す」を意識したものであろう。

（仲）「それ（指示代名詞）」。特定の事物を指す場合と、具体的にはっきり示すのを避ける場合がある。こゝは後者。それの日とは、某日、ある日、という意。土佐日記のはじめに、「それの年の十二月二十日余り一日」とある。「それの年」とは、「ある年」のこと。

（私）波平論文・仲原注釈が指摘するとおり『土佐日記』の第二文を意識したもの。日付の表記もだが、「船出す」の文末もやはり同日記の「門出す」に対応している。

②小那覇

（栄）地名。現在の西原村小那覇部落。

③道すがら

（栄）道の途中。道々。

④景気

（栄）景色。

⑤ながめ

（栄）つくづく見守る意。

⑥「うらやましくも」と詠み給ひけむ業平の君

の昔ぞおぼゆる。

（栄）伊勢物語に「いとどしく、過ぎゆく方の恋しきに　うらやましくも　かへる浪かな」とある。／思い出される。

（波）「うらやましくも」とは、既に指摘されているように、『伊勢物語』第七段、

むかし、おとこありけり。京にありわびて、あづまにいきけるに、伊勢、おはりのあはひの海づらを行くに、浪のいと白く立つを見て、

いとゞしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな

となむよめりける。

を踏まえたものである。離れてゆく都を惜しむ歌である。……（中略）……光源氏が須磨に舟出する場面に次のような記述がある。

渚に寄る波のかつ返るを見たまひて、「うらやましくも」とうち誦じたまへるさま、さる世の古事なれど、めづらしう聞きなされ、悲しとのみ、御供の人々思へり。

「うらやましくも」とは、『伊勢物語』前引の「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな」を踏まえている。光源氏もまた、都を離れて須磨へ舟出する際に業平の故事を思い浮かべたのである。そうすると、「貧家記」の主人公が「たゞ返る波のみうちながめられて、うらやましくもと詠み給ひけん業平の君の昔ぞおぼゆる」と記した背景には、東下りをする在原業平と、業平を思いながら須磨へ下る光源氏の面影が共にあったと考えられる。……（中略）……そしてさらに同じ行文が謡曲『杜若』にも見られる。

海面に立つ波を見て　いとどしく　過ぎにし方の恋しさに　うらやましくも　かへる波かなと　うち詠め行けば

（仲）伊勢物語七段に「いとゞしくすぎゆくかたのこひしきに、うらやましくもかへるなみかな」—住みなれた都を去って、東国へゆく我身にひきかえ、波はどんべ都の方へと、帰ってゆくので、うらやましいという意。／「在原業平（八二五～八八〇）」平安時代の歌人。伊勢物語の主人公。美男子で色好みとして名高い。

（那）『伊勢物語』第七段「いとどしくすぎゆくかたの恋しきにうらやましくもかへるなみかな」（『後撰集』巻一九・羇旅・業平）を引く。主人公の男が京から東国に向う途中、伊勢・尾張の国の間の海岸で白い波を見て詠んだ歌である。／「業平の君の昔」とは、『伊勢物語』第九段の東下りを示している。

（私）諸氏が指摘するように『伊勢物語』第七段を意識した文であることは確かだが、加えて、この引用の仕方じたいは、

今宵、月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の、「山の端逃げて入れずもあらなむ」といふ歌なむ思ほゆる。（『土佐日記』一月八日条、新全集二四頁）

という『土佐日記』の一節を意識していることに注意しておきたい。なお、続く「舟子ども」が「思ふことなげ」に「歌などうたふ」様子も、同日記の

かく思へば、船子、楫取は船歌うたひて、何とも思へらず。（『土佐日記』一月九日条、新全集二六頁）

に重なる。

(2) 上記は、いってみれば「研究のための研究」成果であるが、同時に報告者はこれを「教育」に活かすことを試みた。

これにはいささかの事情があり、本研究期間と同じ３ヶ年間、報告者の所属する琉球大学教育学部において、大事業「21 世紀おきなわ子ども教育フォーラム」が行われ、報告者はそれの事務局員として活動した。この活動は非常に負担が大きく、そのため本研究の第二の柱であった近世琉球の和歌文学のデータベース作りは、完成に至らなかった。

が、一方で、この「21 世紀おきなわ子ども教育フォーラム」の某企画の中で、平敷屋朝敏の擬古文物語を中学生向きにわかりやすく教材化することができた。

「単元：琉球で生まれた古文の物語を味わおう～平敷屋朝敏作『萬歳』を読む～」と題したものがそれであるが、これは『萬歳』の本文の一部を教科書向きの表記に改め、現代語訳を付したほか、それを読むためのわかりやすい解説文を「はじめに」として添えたものである。その「はじめに」を以下に引用する。

みなさんは「古文で書かれた物語」といえば、どんな作品を思い出すでしょうか。『竹取物語』、『源氏物語』、『平家物語』……ヤマトの言葉（日本語）で綴られたこれらの作品は、言うまでもなくいずれもヤマト（日本）で生まれた文学です。

わたしたちが住む沖縄が琉球王国を名乗っていた西暦一七〇〇年代——このころの琉球は中国に対して臣としての礼節を尽くす一方で、一世紀ほど前に侵入してきた薩摩藩の支配を受けてもいました——、なんとヤマトの言葉で物語をつづった文学者が、ここ沖縄に存在したのです。その名は平敷屋朝敏（一七〇〇～三四）。琉歌を詠み組踊の台本を執筆するなど琉球文化に親しむかたわら、和歌を詠みヤマトの文学をまねて物語を執筆したという、才人でした。若いながら慶賀使にしたがって江戸上りをした経験もあり、周囲に才能を認められていたようですが、仲間とともに時の権力者・蔡温を批判する文書を書いたため処刑された、と伝えられています。

朝敏がヤマトの言葉で書いた物語は、『若草物語』『苔の下』『貧家記』そして『萬歳』の四作品であるとされています。ヒロインの死と

いう結末を迎える若い恋人たちの悲恋を描く『若草物語』と『苔の下』、志を持ちながら首里王府から退けられた者の苦難を描く『貧家記』、これらも魅力的な物語ですが、ここでは、紆余曲折を経て幸せな結末を迎える恋人たちを描く『萬歳』という物語を、紹介しましょう。

安里の按司の三男坊・白太郎金は、文才と楽才に恵まれた美青年。女性に人気ですが恋愛には興味がありません。が、ある日、「萬歳」と呼ばれる芸人に「あなたにふさわしい美しい姫君が勝連にいる」と言われ、関心をいだきます。どうにも気になり夜も眠れず、ついに彼は忠実な飼い犬だけを連れてひそかに家を出、まだ見ぬ美女・真鍋樽金の住む勝連の浜崎に向かいました。

彼女の父は浜川殿という土地の有力者。白太郎金はつてを得て浜川殿が主催する宴に参列し、そこで見事な笛の演奏を披露します。その様子を見た真鍋樽金は彼に恋心を寄せますが、彼女にはすでに親が決めた許婚者（権力者である太守の三男）がいたのでした。

近づく結婚の日……真鍋樽金への思いを断ち切れない、けれども今さら何ができるわけでもないのだと一切を諦めた白太郎金は、ある悲壮な決意を固めます。

このあと、いかなる運命が若い二人を待ち受けているのでしょうか……。さあ、ここからは物語本文そのものを読んでみましょう。

本研究課題に取り組んだ、そして同時に「21 世紀おきなわ子ども教育フォーラム」事業に取り組んだ３ヶ年は、ちょうど小・中・高それぞれの学校現場が、改訂された学習指導要領（国語科）の大きな目玉のひとつ「伝統的な言語文化」の教授の仕方を模索しはじめた時期に相当した。そのなかで、教育学部に籍を置く報告者の研究は、上述のような形で「教育」に活かしていく可能性が生まれた。この『萬歳』の教材は、早速「教員免許状更新講習」において現場の国語教師たちにも紹介したが、大いに刺激を与えたようであった。

(3)本研究は、「近世琉球に日本文学の潮流をみる」点において国内の日本文学史研究に一石を投ずるものである。同時に、国語教育における「伝統的な言語文化（の地域・地方版）」教材開発の可能性を秘めたものでもある。さらに時間をかけて考究と開発に臨みたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 萩野敦子、狭衣（狭衣の草子）、国文学研究資料館・平成 21 年度研究成果報告書『物語の生成と受容⑤』、査読無、2010、157－160、
② 萩野敦子、平敷屋朝敏作『萬歳』と『狭衣物語』、北海道大学国語国文学会・国語国文研究、査読有、137 号、2010、23－37、
③ 萩野敦子、単元：琉球で生まれた古文の物語を味わおう～平敷屋朝敏作『萬歳』を読む～、沖縄発「伝統的な言語文化」の学びの創造、査読無、2011、123－139、
④ 萩野敦子、〈移動〉からみる中古王朝物語文学史・粗描、『狭衣物語　空間／移動』、査読有、2011、247－274、
⑤ 萩野敦子、琉球発・ヤマトコトバの恋物語―平敷屋朝敏『萬歳』を読む、『やわらかい南の学と思想４・普遍への牽引力』、査読無、2012、38－49、

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：
○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
特になし

６．研究組織
(1)研究代表者
萩野　敦子（HAGINO ATSUKO）
琉球大学・教育学部・教授
研究者番号：90343376

(2)研究分担者
なし（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
なし（　　）
研究者番号：